

山口県立美術館ニュース

# 天花

TENGE

第55号

平成5年1月1日  
発行山口県立美術館



松林桂月 仙峡聴泉図



(部分)

## 松林桂月

1876(明治9)~1963(昭和38)

## 仙峡聴泉図

1929(昭4)

紙本墨画・軸 221.9×61.4cm

昭和四年の第一〇回帝展に松林桂月は、「長門峡」(現在東京国立博物館蔵)という大作を出品した。縦三メートル近くにも及ぶ長条幅であり、桂月自身渾身の気力を集中させて描いた自信作でもあった。

長門峡は、山口県の北部に位置し、萩へと流れこむ阿武川の upstream に沿って続く奇峰奇岩の多い景勝地として知られる渓谷である。桂月は、ここを昭和三年の一〇月に訪れ、その景を写生して歩いたのであった。すでに日本画家の高島北海やエドワード・ガントレットらによって長門峡の名はかなり知られてはいたものの、まだ歩道や標識なども整備されておらず、五〇歳代半ばの桂月にとつては弟子の手を借りながらのかなりの強行軍であったという。しかしこの写生行は、まさに桂月の以後の山水風景画を決定づける意味をもったのであった。

帝展出品の「長門峡」は、峡中の切子、切窓というふたつの奇峰が並んでそびえる景を、ちょうど渓谷の下から見上げるように描かれている。画面全体には、細くからみつくような描線が微細に展開しながら、右上から左下がりへの特徴的な構図を構成している。

かつてこの作品を見た川端龍子が「桂月の長門峡に就いては片々たる他の一般の風景画とは同日の談ではないが、その南面の主張の立脚点からしては、それに石皴があつて質がなく、樹木あつて籟がなく、水あつて音がなし、只練達の筆技に敬意を払うのみである。」と評したというが、なかなか手厳しいながらも的確な批評といえるだろう。

あまりにも細緻に描き込まれた画面は、かえつて余韻を損い、たしかに観者に煩雑な印象を与えかねないが、その細部をじっくりと見つめると、墨の濃淡、潤濁、疎密などが、実に丹念に描き分けられ、桂月の熟達した筆技が遺憾なく発揮されていることに気づくのである。このことについては、豊田豊も「墨一色の技巧を以つて此複雑にして大積の画幅を破綻なく纏める鮮やかな芸当は、心練れ、筆練れた後ちの大人芸であつて、若い作家達はその余りに高い画技の境地を空しく仰ぎ望むより他ないであらう。」

(『美之園』昭和四年一月号)と述べたのであった。

ここに紹介した山口県立美術館蔵の「仙峡聴泉図」は、「長門峡」と同年に描かれた作品で、やはり長門峡の景を取材して出来上がった作品である。「長門峡」の完成までには数多くの写生や小下絵が生まれたが、そうした習作が再び組み替えられて桂月の新たな山水作品となつたのであった。岩山の部分には筆をこすりつけるようにして描く擦筆という技法が使われ、岩肌のザラザラとした感覚が印象的である。画面左下で、溪流に聞き耳をたてる人物は、おそらく桂月自身の姿をだぶらせているのだろう。その人物はまた、桂月のあこがれる深山に暮らす仙人であり、隠者の姿でもあった。

(菊屋吉生学芸課主任)



松林桂月「長門峡」1929(昭4)  
東京国立博物館蔵

# 大正日本画

## その闇ときらめき

大正期の日本画の様相については、近年とくに各地の美術館の展覧会企画や美術雑誌の特集記事などでもとりあげられ、なかにはかなり大規模に、そして詳細に事象と作品を紹介しようという注目すべき企画もいくつかみられ、その雰囲気や状況に対する一般の認識と関心の高まりを実感できるようになってきた。こうした風潮や動きは、すでにいったんは忘れさられようとした大正期日本画の実相を、徐々にではあるが確実に現在のわれわれの前に甦らせつつあるといえるだろう。

ただこの大正期日本画の見直しの内容はというと、基本的には文・帝展の動向、また東京においては紅児会から赤曜会への動きを含んだ再興日本美術院の状況、さらには京都においては国画創作協会の活動が中心として語られる場合が大半であり、その他の動きについて触れようとしたものは、きわめて限られている。ところが、当時の若い日本画家たちによる新しい日本画の動きという観点から再度丹念にこの時期を見直してみた場合、これら三つの動きと関わりをもちながらも、また別個のきわめてユニークな日本画の研究団体や小グループが存在していたこと

に気づくのである。

このたびの展覧会は、大正期に生まれたこうした若い日本画家たちによる研究小団体や小グループ、あるいは特異な画塾に焦点をあて、その流れや相関関係をさぐることににより、これらの活動の大正日本画史における位置づけを考えてみたい。すでに大正期全般の日本画の状況がかなり明らかになりつつある現在、総論としての大正日本画史よりも、そろそろ各論の積み重ねが必要な時期にさしかかっているように思えるからである。

つまり大正期に起こった特色ある個々の運動体を顕彰していくことによつて、逆に総体としての大正日本画の状況をさらに明確にしようと考えるのである。

展覧会の作品は、構成上「新日本画模索から前衛絵画へ」、「幻夢のけしき、おんな」、「内へのまなざし―京都の日本画」の三つのセクションに分けられている。次にそれぞれのセクションについて述べてみたい。

### I 新日本画模索から前衛絵画へ

ここでは、大正初期に東京美術学校日本画科の卒業生により結成された行樹社。また大正期に異色の制作

活動をおこなった尾竹竹坡とその門下による八火社。さらに大正末期に五つの小グループが結集した第一作家同盟。以上の三つの日本画小団体の動向について見てみたい。

まず行樹社では、世紀末美術の強い影響を受けながらも、特徴的な線條描写と思いきった色彩の平面化がそれらの作品上で試みられたといえる。これらの試みは明治末期以降、日本画の新たな方向として生まれた写生主義を基本に成り立ったものであるが、形態や色彩面で大正初期の新鮮感を加味しながら、日本画の新しい内容を拓くものであった。

尾竹竹坡は、初期院展の有望株として囑目されながら、岡倉天心と対立し、日本美術院を離脱した日本画家である。その後は文・帝展を舞台に活躍するようになるが、その間も当時としては驚くほど斬新で機知にあふれる実験作を制作した。また竹坡は常にアカデミズムへの対抗心をたぎらせ続け、大正末期にはついにその門下とともに八火社を旗上げし、新来の美術思潮として知られつつあった未来派の動向を積極的にとりいれた活動を展開したのであった。

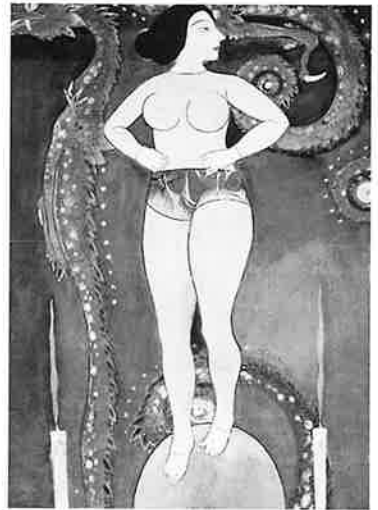
最後に、現在日本のプロレタリア・アートの先駆的な動きのひとつと



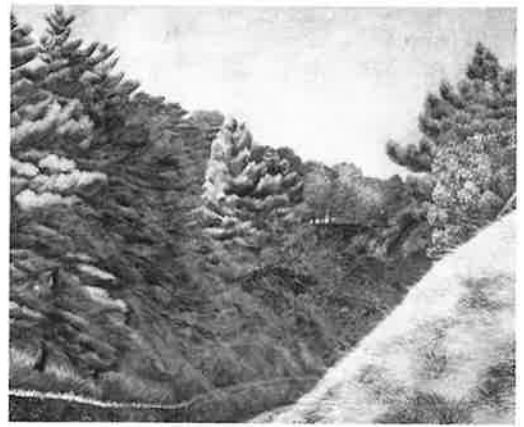
写真②



写真③



写真①



写真④

して評価される第一作家同盟の活動をとりあげる。これは大正末期に、行樹社、青樹社、高原会、蒼空邦画会、赤人社の五つの日本画グループが結集した団体であった。なかでも高原会系の画家たちが最も急進的で、階級意識に根ざしたプロレタリア芸術の建設をめざしたが、他のグループの画家たちとの芸術観のちがいで、いから内部対立を生じ、一回展覧会を開催しただけで結局崩壊してしまつた。

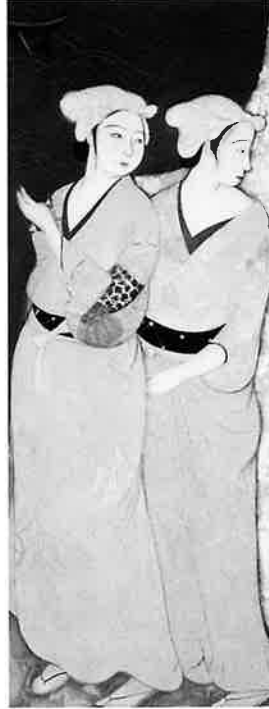
出品画家―川崎小虎（行樹社）、小林源太郎（行樹社・第一作家同盟）、水島爾保布（行樹社・第一作家同盟）、広島晃甫（行樹社）、矢部友衛（行樹社）、大沢恒躬（行樹社）、星川清雄（行樹社）、太田聰雨（青樹社・第一作家同盟）、小林三季（青樹社・蒼空邦画会・第一作家同盟）、真野満（青樹社・第一作家同盟）、尾竹竹坡、佐藤日梵（八火社・青樹社・第一作家同盟）、落谷虹児（竹坡門下）、玉村方久斗（密栗会・高原会・第一作家同盟）、高木長葉（蒼空邦画会・第一作家同盟）、山内神斧（密栗会・蒼空邦画会・第一作家同盟）、奥村土牛（蒼空邦画会）、森谷南人子（蒼空邦画会・第一作家同盟・国画創作協会）、神坂



写真⑨



写真⑦



写真⑥



写真⑤



写真⑧

- 写真① 広島晃甫 玉乗り (明45)  
 ② 尾竹竹坡 男女 (大3)  
 ③ 佐藤日梵 関東大震災銀座通り (大13)  
 ④ 高木長葉 火薬庫の土手 (大11)  
 ⑤ 寺島紫明 夕月 (大5)  
 ⑥ 樋口富麻呂 船宿の女 (大10)  
 ⑦ 三宅鳳白 山中平九郎之図 (大4)  
 ⑧ 榊原始更 ヘリカン (大正～昭和初期)  
 ⑨ 梶原緋佐子 門づけ (大14頃)

松濤 (蒼空邦画会・第一作家同盟)

## II 幻夢のけしき、おんな

ここでは、大正期に生まれたたつの特異な画塾展をとりあげる。東京において錦木清方門下によって大正四年に成立した郷土会展。大阪にあって北野恒富門下によって大正一年から始まった白耀社展である。

いずれの展覧会も、大正期独特の雰囲気をたたえた暗く重々しい風景画や、耽美的で妖しい匂いをもつ美人画が多く出品されていた。

とくに清方門下では、大正期の新版画運動に新境地を拓いた伊東深水や川瀬巴水がいて、色面の摺り重ねを駆使した詩情あふれる作品を制作した。また、「悪魔派の画家」と呼ばれた北野恒富の門下にも多くの特異な画家が輩出し、関西の美人画の伝統に異彩を放つ活動をおこなった。

清方も恒富も、ともに歌川国芳の玄治店派の系譜を受けつぐ画人であり、本質的に人間の情念を見つめようという側面をもちえていたわけである。こうした姿勢が弟子たちにも間接的に影響を及ぼしたのである。

出品画家―錦木清方、伊東深水 (郷土会)、寺島紫明 (郷土会)、川瀬巴水 (郷土会)、北野恒富、島成

園（白耀社）、樋口富麻呂（白耀社）、中村貞以（白耀社）

### Ⅲ 内へのまなざし—京都の日本画

明治末から大正初期にかけての竹久夢二の制作および活動は、当時の若い日本画家たちにも少なからぬ影響を及ぼした。夢二は、京都においては後の国画創作協会会員となる野長瀬晩花と密接な交友があり、また場末の女や人生の苦悩、悲嘆を描く異色の画家秦テルヲとも交流をもっていた。かれらは社会の底部に目をそらさず、人間愛にもとづいた情感を重視しようという共通した芸術観をもち、「人生派」と呼ばれたのであった。夢二はこうした態度のもと、これまで芸術としてみられていなかった挿絵やスケッチ、あるいは雑誌のコマ絵など、いわゆる「草画」と自らが呼ぶ一種の略画の形式を生みだし、晩花もテルヲもこの方向に共感をもったのであった。

密栗会は、大正初期に京都で結成された研究同好会で、これまた後に国画創作協会会員となる村上華岳や入江波光なども参加していた。ここでは、会員同士連れだつての写生会がおこなわれたり、実験的な内容をもつ小品を展示する展覧会が開催さ

れたりした。こうした制作の在り方は、明らかに先の夢二をはじめとする三者の作画の姿勢と大変似通った側面があることにも気づくのである。この志向は、やがて濃厚なデカダンスやエロティシズムの香りを加えながら徐々に変容し、大正末期の独特な日本画の状況を形づくり、その流れは確実に国画創作協会の一部へとつながっていったのであった。また当時この国画創作協会の他にも、杉本哲郎らによる白光社などの特異な小グループもあった。

出品画家—竹久夢二、秦テルヲ、野長瀬晩花（国画創作協会）、甲斐庄楠音（密栗会・国画創作協会）、岡本神草（密栗会・国画創作協会）、村上華岳（密栗会・国画創作協会）、入江波光（密栗会・国画創作協会）、星野空外（密栗会）、不動立山（密栗会）、小西長廣（密栗会）、宇田萩邸（密栗会）、三宅鳳白（密栗会・第一作家同盟）、伊藤柏台（密栗会・国画創作協会）、榊原始更（密栗会・国画創作協会）、稲垣仲静（国画創作協会）、岡村宇太郎（国画創作協会）、梶原緋佐子（国画創作協会）、杉田勇次郎（国画創作協会）、白山春邦（国画創作協会）、澤田石民（国画創作協会）、杉本哲郎（白

光社）

大正期の日本画の流れを見る時、とかく関東、関西が別個に語られることが多いが、同時代の先鋭な意識をもった若い日本画家たちは、別々というよりは互いに強く関わりをもちあい意識しあっていたのである。とくに大正中期以降になると、展覧会のように展覧会を関東、関西の二カ所に開催する小団体が増え、結果的に新しい意識を求めようという若い日本画家たちが地域を超えて出品するようになり、互いの交流もかなり密接なものが生まれていった。かれらとともに、外国からの美術思潮もふくめた新動向に敏感であり、それらを自らが生きた大正という時代性のなかに融け合わせようと試みたのであった。

またかれらの絵画の在り方には、美術のみならず当時の詩や小説といった文学にも積極的に関わりをもとうとした姿勢が、濃厚にうかがえる。現にこの時期の少なからぬ若い日本画家たちが、詩人であり、小説も書いていたのであった。またこうした事実そのものが、きわめて大正的な現象であったともいえるのである。

今回展覧会に出品される全一五点のなかには、大正以降、こうした

公の場に展示されるのが初めてのものもかなりの数ふくまれている。いまだ大正期の日本画の実相は、発掘途上にあるといえるだろう。そうした意味からもこの展覧会をさらに新たなきっかけとして、大正日本画史の流れの表面下にあつて、今もって埋もれたままになっている側面が、少しでも掘り起こされるようになることを切望してやまない。

（菊屋吉生学芸課主任）

#### 会期

1月5日(火)～2月14日(日)

月曜日休館

#### 料金

一般 七二〇(六一〇)円、  
高年生 五一〇(四一〇)円、  
小中生 三〇〇(二〇〇)円

( )内は20人以上の団体料金

## 父桂月と母雪貞

松林  
清風きよかぜ

大正六（一九一七）年の新春早々、亡父桂月に京都の橋本関雪画伯から一通の書状が届いた。年賀の辞に続けて、「内事に立入り、近来甚だ欠礼に候へども、目下女流作家にて東海晴湖逝去後骨力あるもの乏しく、小蘋女史は疲弊甚しく、松蕉二園の如きは高堂の品に乏しく、この際雪貞夫人の奮起囑望して止まず候。御作品は曾て二三拝見、その品、その技共に松蕉二園の上に有之候。是非御一考願上候。翰林風尚の為め祈上候。この事は他日、尊公に拝し、縷々申上候、草々。十四日夜、橋本生。桂月学兄、坐下」と、画伯独特の論法で、既に表面の作家活動を退いて久しい雪貞の画壇復帰を、夫の桂月に極めて熱心に促している。これに対して、関雪画伯に引けをとらず気性の激しかった父が、どのように対応したかはさておき、桂月夫人雪貞の画壇引退は、当時のジャーナ

リズムにも、あれこれ波紋を投げ掛けたようである。

例えば、大正二（一九一三）年三月三日付の『夕刊・中央新聞』には、「画室より台所、桂月夫人松林雪貞」と見出しも大きく、雪貞引退の取材記事が載っている。ここでは桂月が、「台所の方は放擲うろたって画ばかり描いて居るなどは独身ならよいが、人の女房となつてすることではない」などと、記者の表現を借りれば「忽ち風を生じて頗る猛烈」な語勢で語り、傍らに添う雪貞夫人は、「私共は矢つ張り人の女房ですから良人の云ふ通りになるのが真個まごと思ひます。あるお方がお仰ついました。女の画家などは独身の時は世間の云ふ人気がありますが、結婚すると宛よるで人氣が落ちますって……。矢張り夫れで通すなら独身で居なさる方がよろしいのでせう」と、頗る夫唱婦隨に答えている。そしてその記事

の結びには、「夕闇は迫つて談話は途切れた。女史の色白な顔には束髪がよく似合つて宛然画中の人となつてしまつた」と、書かれている。

\*

そもそも桂月夫人が、雪貞女史の画号で、野口幽谷（一八二七〜九八）門下の画家だったこと、桂月と結ばれて間もなく作家活動を閉じたことなど、今では知る人ぞ知る逸事だが、母は父より二年遅れて、明治二九（一八九六）年五月、牛込喜久井町の「和楽堂」幽谷塾に入門し、師より「雪貞」という美しい号を頂戴したのは、十八歳の時であつた。

そして、その年の十月には、早くも初出品の「黄金白玉図」が日本美術協会展で「褒状・三等」を受賞している。それ以後も、履歴書を見ると、美術協会、女子美術協会、日本画会、正派同志会、或いは日本南宗画会などの諸展で受賞を続け、三二年の美協展では皇后陛下の御前画を勤めたとある。然し、明治四一（一九〇八）年以降、賞罰欄は空欄のままとなつている。第二回文展（明治四一年）には、夫の「游鴨図」と共に「秋圃図」が入選しているが、その後は縁のある美術協会、日本画会、

それに夫の主宰する「天香画塾」展を例外として、文展などへの出品は一切ない。

思うに、この「明治四一年」が雪貞女史の、女流画家より内助の勞にその身を委ねる転機になつた年のようである。

然し、私は、正直に言つて、母が画壇を去つた真因を未だ解明出来ずにいる。生前の母から直接その心情をただすのを怠つた今となつては、残念ながら遺稿にある父の述懐から忖度する外はない。

\*

旧姓を伊藤桂月といつた父と母松林雪貞の結婚は明治三一（一八九八）年であつた。自筆「桂月山人年譜」にはこう記されている。「戊戌・明治卅一年・廿三歳。幽谷先生歿（六月廿六日）。松林有風の養子となり、孝子と結婚。予、病を以て萩に帰る。これを補足すれば、松林有風は雪貞の実兄で、耕霞と号し、詩、書を能くした文人。孝子（戸籍名・かう）は勿論、雪貞の本名である。ただ、年譜の記述で不可解とするのは、雪貞にはこの時、実父母の高風（旧白河藩士・俳人・号花翁）夫妻が健在で、結婚後も麴町三番町



松井英次郎 「小休」

宅に同居し、生涯にわたり孝養を尽くしているのだが、何故、桂月夫妻は兄と養子縁組しなければならなかったのか、その説明が全くなされていないので、これも又、確かめようのないまま、私には謎である。

遺稿『糟糠の妻』に、その頃を回顧したくだりがある、「縁ありて結婚し、愈々同棲したのが私の廿六歳の時で、当時私は肺を病んで頻りに

咯血をやって居る時であった。(中略)どの医者も皆私の病状を見て、三十迄はとても生き得ないとこの死の宣告もしていたのであった。私は早晩死ぬると極まれれば、せめて妻の温き手によって往生する事こそ人生の

意義あるものとして、遂に同棲する事にした。この稿にも、養子縁組の経緯は欠けるが、夫妻の実質的な新婚生活が、療養のため单身帰郷し

て、只一度で中等教員の試験に及第し、それが発表を受けた時の喜びと  
言うものは相擁して只々涙ばかりであつた」、遺稿の一節である。

\*

数年を費やした父桂月の蔵品、遺品の整理と記録が一段落したので、引き続き、私は母雪貞の遺作の分別を進めている。独身時代からの摸

ていた桂月が小康を得て、再び上京した明治三四(一九〇一)年からという事は明らかである。

本、粉本、「種玉堂」と堂号記入の縮図帖、新婚の頃夫婦共同で開いた「環翠画塾」の教材画、中には明治三五(一九〇二)年に作られた夫婦合作の花卉図も含む出品画、依頼画などの小下絵、下図、そして大小の写生帖。十代から学画を始めて、優に七十年を超える雪貞の画業である。当然とはいえ、多種多様、その量も予想を遙かに上回るものであった。

医療と画業の資を確保し、雪貞もまた、苦しい生計を扶けるため、「師範学校・高等女学校図画科教員資格」を取得した。

「妻は自ら画筆を抛って万事内助に当り、私をして一つも内を顧みる必要の無い様にして呉れた。画筆は只私の為に写生をして呉れる時のみ執つた。自分が拙な画を作るよりも、私の研究に資する方がまじだと行って、自ら犠牲になつた」と、如何にも父らしい語調で、母の献身を謝す言葉が『妻雪貞の犠牲』稿にあるが、然し、数多くの雪貞遺作を目にした今、率直に言つて、そうした母の有様を、父に倣つて「明治婦道の鑑」と称えるのには些か躊躇するものが私にはある。もし、雪貞女史が桂月山人と共に、依然画壇に在り続けたら……などと、有り得ぬ想像も起こさせるような、そして、埋もれてしまうには誠に惜しい雪貞作品の数々だったからである。

\*





執筆する雪貞とそれを横で眺める桂月

昭和三八（一九六三）年五月二日、父桂月は楽しみにしていた米寿の行事を直前にして脳軟化症で倒れ入院先の慶応病院で急逝した。最後の別れの時、母が一言「可哀そうに……」と呟いたのを傍らで私は聞いている。その言葉は、夫を送る妻の悲しみ以上に、永年生死を共にしてきた「同志」への哀惜の響きがあったように思われてならなかった。

桂月の一周忌を終えた頃、母は一幅の詩書を作っている。「君去らば春山誰れと共にか遊ばん、鳥啼き花落ちて水空しく流る……」と続く、唐の劉商の七言絶句を録したものが、その筆致は内なる悲しみを押さえた、母らしく凛冽なものであった。

\*

雪貞女史は故桂月山人に遅れること七年、昭和四五（一九七〇）年四月十六日、九二歳という長齢で永眠した。家人も知らぬ間の静かな往生であった。父が逝った直後から、長年にわたる緊張も解けたせいか、急速に心身を弱めていった母だが、最晩年の頃には既に私共眷族の判別すら定かでなく、殆ど物言わぬ静やかな老嫗であった。「先生は誤魔化せ

ても、奥様はどうも……」などと、出入りの衆から評されていた犀利な思考や拳措の片鱗すら見出せぬ母であった。

その母は、逝く間際まで愛用の二月堂に日々欠かさず向かった。机上には多年描き続けてきた写生帖をひるげ、図の輪郭をペンで丹念になぞることに没頭した。七十年絵筆に馴染んできた指は、衰えきった心神に関わりなく自在に運び、一冊一冊を埋めていった。

それは、今なお、夫桂月の画業への献身が続いている心算だったのか、或いはまた雪貞女史の体から消え去ることのない画人の業の深さなのか、作画への凄まじい残り火か……。いずれにせよ、小机に向かい、筆を執る年老いた母の姿は、三代を真摯に生きた女性の終焉として、深く胸を搏つものがあった。

（松林桂月長男）

展覧会特集

マルク・シャガール展

優しさの裏返しは…

高田美規雄

マルク・シャガール、一八八七年、白ロシア共和国ヴィテブスク生まれ。父ザハールは練倉庫で働く人夫、母フェイガリイタは小柄だがつしりとした働きものという典型的なユダヤ系の一般家庭に九人兄弟の長男として育ち、公立学校を卒業後、画家を志してペテルスブルグに出る。のちパトロンをえて帝室芸術保護協会後援の美術学校に学ぶが、アカデミツクな校風になじまず、最終的に前衛派のレオン・パクストの指導するスワンセヴァ美術学校に学ぶ。二三歳でパリに出て、活発で多様な今世紀初頭の美術運動に触れ、一九一四年一時帰国した折に第一次世界大戦が勃発し、滞留を余儀なくされたためモスクワ、ヴィテブスクなどで美術

状況の改革に従事。二三年、革命政府との折合が悪くなったのを機に故国を去る。第二次世界大戦間はアメリカに亡命したものの、おおむねフランスを拠点に活躍し、初期にはプリミティヴな形式で土俗性を感じさせる表現を展開し、やがて明快な色彩による叙情性豊かな油彩画や版画などに独特の表現を確立して画名を馳せた。一九八五年、九七歳で逝去す。

※

シャガールの略歴を記せば以上の通りである。

ところで、ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」のイメージをも作り上げたシャガールの作品は、そのミュージカルの通り、亡命ユダヤ人の意識に深く貫かれていると考えなければならぬが、それらがそうした悲惨さや悲劇性を正面から語るものではないことは明らかだし、むしろ正反対ともいえる優しさに常に包まれているように思われるのはどうしてだろうか。自分の故郷での半生を綴った『わが回想』にしても、そこには、自分が深く関わった新体制との決別によって故郷を去らねばならなくなった憤りとか無念さは記述されず、むしろ淡々とした語り口

で郷里および知人たちへの愛が述べられているばかりであるのは、一体なぜなのだろうか。

こうした疑問に明快に答えることはおそらく不可能にちがいない。しかしシャガールの作品が日本人に親しまれ、数多くの展覧会を通じて広く紹介される度ごとに、常にこの根本的な疑問に私たちは立ち返る必要があるだろう。というのは、民族意識とか差別被差別の意識に根ざした問題は、一般論としてもわれわれの苦手とする領域の問題だからであり、表面上の華やかさや甘美さに留まった理解では、シャガールの場合、余りにも表面的に過ぎるからである。

帝政期末には産業のあらゆる部門に技術者としての多くのユダヤ人を抱えていたロシアは、西ヨーロッパ諸国がユダヤ人解放政策に概ね向かった一九世紀後半においても、おそらくは近代化の立ち遅れの中で国力を維持するために、迫害を続けながらもなお彼らが必要とし、国内に押し留めようとしていたといわれている。その傾向は、革命期を挟んであからさまな形を取らなくなったとはいわれるものの、一方では東部地域開発の必要性もあつて、今度はユダヤ人の国外への移住禁止という形で制度

的な囲い込みが実現されることとなる。シャガールは、まさにそうした時代状況にどっぷり身を置いていた画家であった。しかしながら『わが回想』の中には、前述のように、ユダヤ人として生まれ育った環境を卑下したり、苦勞話し風に語る部分はまったくといっていいほどない。この自伝は、革命後の混乱期に故郷を見限つて西側へ脱出しようとするさなかに執筆された、いわば別離の辞である。にもかかわらず、自分たちの置かれた境遇に対する不満や非難めいた言葉はほとんど聞かれなないことは、シャガールにとつての環境というのは、あるがままそれを引き受けることだった、あるいは有無をいうまでもなく引き受けざるを得ないものだったということの証拠ではないだろうか。つまり現実はどうしようもなく重たく、繰り言など端から受け付けられない絶望がそこに横たわっている、と考えられるのである。

例えば故郷のヴィテブスクからペテルスブルグへ美術学校に入ろうとして移るにしても、特別の許可証がなければ街に住むことさえかなわないのである。その許可証を得るために看板描きになろうとしたり、弁護



「肉屋（祖父）」1910



「枝」1956~62



「パレード」1968~71

士の使用人に成り済ますことは、彼にとつてはむしろ当然のことであつただらうし、そしてそのようなことは、掃いて捨てるほどにあつたと思われる。しかしシャガールは、その

一つ一つを描き出すのではない。「私を幻想的と呼ばないで欲しい。反対に私はリアリストなのだ」と彼はいつた。それは、私たちにとつて幻想的に感じられるモチーフの組合

せや色彩の効果が、単にロマンティックな想像力の産み出すものではなく、ハシデイスムという汎神論的なユダヤ主義に基づくものであることを示している。自由と解放を約束す

## シャガール展

1993. 3. 4 (木) ~ 4. 11 (日)

一般 1000 (800) 円

高大生 700 (500) 円

小中生 500 (300) 円

( ) 内は前売・団体割引料金

るあるべき世界は、現実の彼方にあるのではなく、実際の厳しい状況の中に内在しているものであり、彼はリアルということばを目に見える断片的な世界に限定しないというに過ぎない。逆にいえば、そのように限定的に物事を考えたのでは何も描くことができないほど、彼らの現実は無望のだからということにもなるだろう。郷里ヴィテブスクやパリの街は、画家個人の生涯ときりはなせない場であつた。それと同じ意味において恋人たち、ピエロ、ヴァイオリン弾き、トラーを抱く老人、牛、馬、鶏などは、彼の生活に欠かせない存在である。しかしそれはあくまでも視線を向けたその場所にそれらがあるということではなく、画家の生の営みにおいて現実に存在しなければならぬものなのである。そしてもうひとつ注目しなければならぬのは、それらの間に中心性や階層性が見られないことである。画面のそこここにはばまかれたモチーフは、そのどれかに視線を集中させることなく絵画的な全体を表しており、同じような作品の繰り返しによつてもそのことが強調されているといえるだろう。

(当館学芸課主任)

# 美術館から

山口県美術展覧会終わる

第四六回県美展が終わりました。今年度は、昨年にひきつづき全応募作品を七人の審査員全員で合同審査する方法で審査が行なわれ、一覽表のような結果ができました。また、会期中には、二回目の県美展をめぐるシンポジウムがつぎの出席者で開催され、活発な議論が交わされました。第四六回山口県美術展覧会記録作品受付 9月18日(金)～20日(日)

## 入賞作品

### 大賞

「Sound Training op.V『論理絵と現象』」 荒瀬景敏 (山口市)

### 優秀賞

「処女航海」 井岡義朋 (小郡町)

「海夢」 井頭弘美 (徳山市)

「MORAY」 緒方一美 (山陽町)

「『サビエル記念聖堂』鎮魂歌」 山口聖範 (山口市)

「霧の樹林」 藤井保 (光市)

「天地の(万葉長歌と反歌)」 横田敬子 (岩国市)

「蝕まれゆくエンタシス」 兼原啓二 (防府市)

### 佳作賞 (入賞作品名略)

花田博通 (下関市) 平本成美 (光市) 小田

善郎 (山口市) 向輝司 (宇部市) 戸嶋由香

(萩市) 河村ゆみこ (須佐町) 矢儀浩嗣 (徳

山市) 古村裕子 (下松市) 萩野靖夫 (徳山

市) 津森吉孝 (下関市) 石黒和敏 (防府

市) 松永和彦 (新南陽市) 鹿嶋俊江 (秋芳

町) 國清悦生 (小野田市) 泉幹男 (宇部

市) 森野清和 (豊浦町) 田中ミノル (光

市) 大和明美 (下関市) 中村武男 (山口

市) 伊藤廣幸 (萩市) 大和潔 (山口市)

審査 9月21日(月)～22日(火)

会期 9月29日(火)～10月14日(水)

搬出 10月16日(金)～18日(日)

シンポジウム

日時 10月11日(日)

場所 県立美術館講座室

テーマ 受賞者と語る

コーディネーター

川口政宏(山口大学教育学部教授)

パネリスト

奥津 聖(山口大学人文学部助教授)

荒瀬景敏(大賞受賞者)

井頭弘美(優秀賞受賞者)

兼原啓二(優秀賞受賞者)

斎藤郁夫(当館学芸員)

## 三月までの特別展

大正日本画―その間ときらめき

1/5～2/14

山口大学卒業制作展2

2/18～2/21

山口芸短大卒業制作展

2/25～2/28

マルク・シャガール展

3/4～4/11

## 三月までの常設展

### 【第一常設展示室】

・絵画展示室(香月泰男記念室)

シベリア・シリーズⅡ

シベリア・シリーズⅢ

・絵画展示室(小林和作記念室)

藤田隆治の世界 11/10～1/24

小林和作の世界 1/26

・郷土工芸室

古萩と現代 9/8～10/11

田原陶兵衛展 10/13～12/13

萩焼―茶碗・水指・花入れ

12/15

・資料展示室

木村伊兵衛の写真 11/17～1/17

濱谷浩の写真 1/19～3/21

福田勝治の写真 3/23

【第二常設展示室】

日本画名品展 10/20～12/20

山口の近代洋画 10/20～12/20

雲谷派の流れ 2/23

\*休室のお知らせ

第二常設展示室は『大正日本画―その間ときらめき』展の会場使用のため、12月22日(火)から2月21日(日)まで休室します。

## 第46回山口県美展総括表

出品数	入選数	入賞数	展示率	出品数	入選・入賞者数
846 (867)	122 (129)	29 (31)	17.8 (18.5)	540 (556)	147 (154)

\* ( )内は平成3年度

## 山口県立美術館 ニュース

### 「天花」

第五五号

平成五年一月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753 山口市龜山町三十一

☎083-251-7788

FAX ☎083-251-7790

印刷 瞬報社写真印刷株式会社